ISSN-0913-1906

阡陵

No. 42

関西大学博物館彙報
平成13年3月31日発行

〔SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT〕

茶繻子地垣に秋草雁紋様染繻振袖

目次

玉と司祭者 …… 2
昭陵遠望 …… 4
北京・盧溝橋 …… 7
展示のたのしみ－掛軸三昧 …… 10
京の雅、打掛の美－羽間平安理事長寄贈の打掛７点－ …… 12
研究成果としての展示－近年の銭貨の展示から－ …… 14

関西大学博物館
〒564-8680 大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
Tel 06-6368-1171（直通） FAX 06-6388-9928
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm

玉と司祭者

上　井　久　義

勾玉は、日本の古代社会で、宗教とかかわりの深い品として関心がもたれている。特に埴輪が身につけている姿は、これがどの様に使用されているかを知る資料となる。概ね女性が祭儀にかかわる際に装うものと考えられている。この伝統は記紀に見る古代の世界にも引き継がれている。しかし律令制のもとで運用される諸祭祀に参加する神祇官の正装としては往時の姿をしのぶことは難しい。しかし出雲国造北島家に伝わるミスマルノ玉の存在を知ると、祭儀の場で玉が必要とされた伝統が消えさっていないであろうという希望は持てる。

沖縄県石垣市の博物館で、土製の大きな勾玉様の展示品をみかけた。一方に紐が通せる孔があり、勾玉ほどではないが先端部が細く曲がっている。長さは10㎝前後であったと思う。砂糖黍畑を拓いていて出土したという。それも数点がまとまって埋められていた。出土品は、それが使用されていた時期の遺跡内から出土するか関連する遺品を伴わなければ、使用されていた時代や用途を推し量ることが難しい。墓地でもない場所であるから、これが故意に埋蔵された理由もわからない。

沖縄には、かつて琉球国が祭祀を運用していた際に、最高の司祭者であった聞得大君が着用していた玉が伝えられている。大振りの丸い玉の間に、大きな勾玉が編みこまれている。これを首に飾り、公式の祭りの庭で神歌のオモロを謡ったのであろう。琉球には、ノロという女性司祭者が各地にいて、守護神を祀る御嶽で神事を行なっていた。これらの女性司祭者を組織化して統括したのが聞得大君である。国王と妃は明国からの冊封に際しておくられた正装をまとっていた。しかし勾玉は明の服飾にはないので大和の風をとりいれたのであろう。奄美大島の大熊には、琉球国時代にノロに任命され、現在もその機能をうけ継いでいる巫女がいる。任命された際に国王から賜わったというノロの衣装と玉を伝えている。その玉飾りは聞得大君の着用していた品と同じ様式と大きさであったように思う。このことは、王から任命された琉球の巫女たちは、揃って同じ服装で公的祭儀に参加していたことを示している。

沖永良部島を訪れた際に、かつてノロの職にあったという家で、馬のくつわと、勾玉を拝見することができた。ノロは神事のときに、馬に乗って村においでになるという。そこで鉄製のくつわを腰にさげ、シャラシャラと音をさせて村をまわる。このときに首に飾る勾玉も聞得大君の勾玉と同じような大振りのものであった。このことは、琉球の勾玉が単に司祭者の飾りなのではなく、その姿を見れば琉球国の女神官組織の一員であることを明示する規格であったことを示しているように思われる。

関西大学博物館には、ノロたちの勾玉と同類の品が保管展示されている。伝世品であり、その詳細な採集地が明らかではないが、間違いなくノロの勾玉であると考えられる。これらと石垣島出土の土製勾玉を比べてみると、石垣の品はいかにも素朴そのもので、相互に接点をみいだしにくい。強いて接点を求めるとすれば、尚真王の時代に行われた八重山支配である。これによって石垣島は琉球国の女神官制度のなかに組みこまれることになる。首里からは遠隔の地であって、司祭は当地の大阿母役に統括されるようになる。この役の任命にあたって「金ノ髪指・美玉」（琉球国由来記）を拝領したという。美玉とは、ノロたちの正装となった規格品の勾玉なのであろう。八重山では、各地の司祭者を司という。大阿母のもとに統括されていた。現在もその系統を継ぐ女性たちが祭儀を行なっているが、玉を身につけている者はいない。石垣出土の土製勾玉が、琉球国王から賜った美玉であるとは考えられないので、この玉は大阿母役に統括されていた司たちが、その一員であることを示す象徴品であった可能性が考えられる。このことは、琉球国による女神官制度の終焉によって、八重山から勾玉が姿を消してしまったことが考えられる。

伝統的な祭儀は近畿地方とその周辺に伝承さ

沖永良部のノ口家所蔵の勾玉

れていることが多い。宮座と称する祭祀組織がこれを受け継いでいる例がある。三重県南部の二木島に、室古神社と阿古師神社があり、当番の戸主がショウドノとよぶ頭人役を務める。「せうど奉仕心得」帳によると、12月13日に「注連付祭」があり、この時「室古神社奉仕の当人は垢離をかき、神官修祓して御幣を神棚に祀り、祝詞を奏す。終って御統玉を当人の首に懸け授く」とある。また「春土用の中の間日」には、「ツヅ（御統玉）ツナギ祭がある。「早天より両当人は新調の御統玉（みすまる）を白米一舛の上に載せ、御神酒及カケヤイ（なます）を持参し、神社に参拝、神官祝詞を奏し、新古の御統玉を交換、首に懸け授ける」という。このミスマルは、木の小枝を切って皮をとり、芯に孔をあけてつないだもので、これを「ヅヅツナギ祭」と称していることから、これは数珠のことである。神社の神事には数珠を使用することはないので、これはかつて僧侶が関与したことを伝えていることも予想されるが、現状からはそのことはうかがえない。5月5日の祭礼のあと御統玉は神官の手によって当人から除かれる。数珠の首飾りを身に付けている者が司祭者でありその任を終えればこれがはずされる。

三重県の最南部にある神内の集落では、正月に頭屋の当人による弓神事が行なわれる。行事のあと次年度の当人にその役を引き継ぐ。これは境内に当人たちが入って向かいあって座し、旧当人が首にかけている数珠を次年度の当人にひき渡して首にかけて行事は終る。神社の祭祀を当人が担当する場合、多くはその任期は一年間で、次にこれが引き継がれる際に象徴的な祭具や記録が受け渡されることが多い。一般的には頭屋行事に必要な祭具であったり、神社の鍵であることが多い。神社に当人が供える大きな餅を作るための曲物の枠であったりもする。それがこの事例では数珠であったわけである。他に三重県南部の小松でも、当年と次年度のショウドが各1人、向かいあって座し、両者の烏帽子に数珠を渡して役割りの引き継ぎをするが、現在では集落が消滅して行事はない。

司祭者が、玉の首飾りをつけて頭人であることを氏子たちに示す事例を熊野で僅かに見いだすことができたが、その成立時期の古さを示す史料はない。そこで『延喜式』に規定されている祭儀のなかで、玉がどのように使用されているかを眺めてみると、それは大殿祭に見ることができる。これは神今食の翌日に、中臣、忌部御巫らがユウカヅラを付け、忌部はさらにユウダスキをして大殿に入って四角の柱に玉をかけて御巫らが米・酒・切木綿を殿の四角に散き、忌部が祝詞を奏上する行事である。これに続いて湯殿、厠殿、御厨子所、紫宸殿でも同様のことが行われる。このことは『古語拾遺』にも記され、「殿祭・門祭は、元太玉命の供え奉りし儀にて、斎部氏の所職なり」としている。天石窟の神事でも賢木の枝に玉、鏡、青和幣、白和幣をかけたものを、太玉命が捧げ持つとしていることも同じ職掌の内容を示している。これは天照大神に奉るための品であるが、大殿祭では柱にかけるだけになっている。ここでは玉を奉る対象が天照とその司祭者にあったものが、その意義が変化して、祭祀の行われる場所に掲げるだけに終る姿となっている。これは玉を奉献することを職掌としていた忌部氏が、中臣氏を中心とした祭祀進行形態となって形骸化が進んだ結果ではないかと考えられる。

二木島の頭人

昭　陵　遠　望

藤　善　眞　澄

貞観二十三年（六四九）五月己巳、上（太宗）、含風殿に崩ず。年五十二。遺詔に「皇太子、柩の前に即位せよ。喪紀は宜しく漢の制を用うべし。秘して喪を發せざれ」と。

巨星の末期を『旧唐書』はこう伝えている。前年、体調を崩した太宗は、この年4月いらい翠微宮に療養生活を重ねていた。玄武門の変（626）で兄の建成を討ち即位してから23年、晩年は皇位継承をめぐる息子達の争い、両度にわたる高句麗遠征の失敗と派兵中止など、貞観の治も大きな翳りがみえはじめ、満足感と失意の相い半ばする情況に置かれていた。太宗の胸中いかばかりであったか。諡は文皇帝、廟号は太宗。長安に運ばれた亡骸は、その6月1日、太極殿に殯されたのち8月庚寅、醴泉県の東北、海抜1,188メートルの九嵕山上に待つ長孫皇后の昭陵に合葬された。貞観10年6月、36歳でみまかった長孫文徳順聖皇后のために、太宗は自分にとっては寿陵となる昭陵を造営し、来たるべき同穴の日に備えておいたのである。墳丘を築かず、玄宗の泰陵にみた八合目あたりの山腹を鑿ち、玄室がしつらえてあった。

1979年、陪葬の一人、初唐の元勲李勣の陵墓を核に昭陵博物館が設立された。その3年後、この地を訪ずれた時には、道が完備していないという口実で九嵕山に登ることが許されず、李勣の俗にいう下山冢上から、製紙工場の煙をすかして遠望するだけの惨めな旅に終った。後ろ髪を引かれる懐いで立ち去ってから10年、ようやく宿願を果すことができた。「封内一百二十里」と伝える90平方キロの陵園内は公称166基、実数は187基にのぼる皇族や功臣達の陪葬墓をひかえた、沈黙の世界である。その中、博物館となった名将李勣墓と、あたかも太宗の露払いか護衛するかのように並ぶ猛将尉遲敬徳、さらに太宗の第8皇子であり、かの則天武后に戦いを挑んで敗れ毒を仰いだ越王李貞、阿史那忠、張士貴、鄭仁泰。数多の公主（皇女）、中でも長孫皇后との間に生れ、太宗が最も慈しんだ愛娘、長楽公主の陵墓が相次いで発掘された。ここに及んで車道が整備された結果、九嵕山上への登りが可能になった次第。

太宗は貞観20年（646）8月、「功臣に葬地を賜うの詔」を発布した。功臣達に昭陵の南面

徐懋功（李勣）墓・昭陵博物館

左右を墓地として配分するというもので、翌年正月には早くも高士廉が陪葬の栄に浴し（『旧唐書』巻65）、次年度には宋国公蕭瑀。杜如晦とともに房杜つまり名宰相の誉れ高い房玄齢が、これに続いている（同上巻66）。封域を九十九曲する間、元の李好文がまとめた『長安志図』の昭陵図を手に、諸陵の配置を検討してはみたものの、ほとんど参考にはならなかった。それにしても、車窓に見え隠れする大小さまざまな陪葬墓群は、さすがである。『唐会要』巻21に歴代皇帝陵の陪葬者名がまとめて列挙されてあるが、他の皇帝に比べ圧倒的な規模と数を誇っている。

感激のクライマックスは、矢張り九嵕山であった。韋妃、長楽公主墓から峡谷を隔てて聳え立つ景観は、中国屈指の皇帝にふさわしい威容を今に伝えている。墓道から玄室に至るまでの深さ250メートル、前後に石門5基を配し、山上には桟道を渡して往復の便に供したといわれる。墓陵の北側400～600メートルには山門や祭壇、玄武門などの遺址があり、そこには唐代彫刻の傑作と目され、太宗の御馬6頭を板石に刻んだ、いわゆる昭陵6駿が置かれていた。しかし1914年、2駿は盗難に遭い人知れず海外へ運ばれ、現在アメリカにある。残りの4駿は厄を逃れ西安の陝西省博物館に移されているが、若干残る石像その他の遺址を拾い眺めながら、当初の荘厳はいかばかり豪華だったろうか、とつおいつ想像することであった。

陪葬墓群

篆刻の碑石が建つ「長楽公主墓」の玄室に案内される。太宗二十一女中の第五皇女（『貞観政要』巻5）、母后の兄、長孫無忌の長子すなわち従兄にあたる長孫沖に嫁いだが、のち無忌が則天武后の擁立に反対したため、武后の憎悪を買い、夫も嶺外に流された悲運の女性である。

外気は9月上旬の熱風にもかかわらず、墓道は下るにつれ涼、そして玄室は冷気に満ちていた。すでに見事な壁画や碑石等は公表されているが、未調査の妃嬪、公主の陪葬墓も恐らく、同じような型と規模を整えているのであろう。それにしても玄室に向う墓道の左上方に瀝然と残る盗掘の跡には、宿命的なものとはいえ、言い知れぬ空しさと寂寥感に襲われたことを、告白せねばならない。地上にもどり、外から盗穴

韋妃墓

に足を踏み入れると、的をはずして掘り下げたのち、方角を調整しなおしてから、再び掘り進んだ形跡が、一目瞭然である。

盗掘は世の習い、とは承知しながら愚なものである。埋蔵品の数かずは盗みを誘発させ、王朝の交替、支配力の後退とともに、再び日の目を見ることになる。史乗では厚葬を禁止する薄葬令が度たび発せられているが、いっかな効果はなかったようである。

宋の馬令撰『南唐書』巻15の鄭元素伝には、母方の伯父温韜が昭陵を暴いた話を紹介している。温韜は唐末・五代の群雄の一人、岐王李茂貞に仕えて耀州（現在の陝西省耀県）刺史となり、のち後梁に降って静勝軍節度使となった。この静勝軍というのは耀州一円を統轄するもので、漢の陵墓はもちろん、幸か不幸か、唐18陵の大部分が領内に含まれていた。

> 鄭元素自ら〔温〕韜の昭陵を發くを言う。埏道より下り宮室の制度を見るに、閎麗なること人間と異ならず。中に正寢を為り東西の廂には石牀を列べ、牀上の石函中には鐵の匣有り、悉て前世の圖書を藏む。鐘〔繇〕・王〔羲之〕の墨跡は、新たなるが如し。韜悉てこれを取る。韜死して元素これを得ること多しと為す

太宗は王羲之の書を愛するあまり、王羲之七代の孫である智永禅師が弟子の辯才禅師に托しておいた傑作、「蘭亭序」を騙し取ったという話があり、そのシーンを描いた名手、閻立本の筆と伝えるものさえ残っている。太宗は臨終に先だち、「蘭亭序」を自分とともに埋葬せよと皇太子に遺言しているが、鄭元素の言葉どおりだとすれば、郭沫若氏が、今に伝わる蘭亭序は王羲之の書に非ず、と主張したことへの反論になろう。廬山の青牛谷に生涯を終えたこの隠士鄭元素は、古書のコレクターとしても知られ、また伯父の温韜は地の利を生かし、唐の諸陵を手あたり次第に盗掘した、悪名高い人物。必ずしも眉唾ものではなかろう。昭陵発掘調査の日はいつであろうか、鶴首して待ちたい。

昭陵（九嵕山）全景

昭陵前庭の石像と筆者

北京・盧溝橋

松浦　章

Ⅰ

1937年（昭和12）7月7日に北京郊外の盧溝橋での発砲を契機におこったいわゆる盧溝橋事件は、日本軍部による中国侵略を拡大し、1945年8月15日の日本の敗戦まで続く日中戦争の発端の事件としてあまりにも有名である。しかし、舞台となった盧溝橋（写真①、②）そのものに関しては余り知られていないので若干紹介したい。

Ⅱ

光緒『順天府志』巻四十七、河渠志十二、津梁に「宛平縣曰盧溝橋、治南三十里、跨永定河、初架木、金大定二十九年、易石。明昌三年三月成、命名廣利。」[1]とあるように、盧溝橋は北京南西の宛平縣にあり、宛平縣から約15キロの永定河に架けられた橋である。最初は木造であったようであるが、女真民族の金朝の時代に石造に架け替えられた。大定二十九年（1189）

写真①　盧溝橋　対岸より盧溝橋城内を見る

写真②　盧溝橋全景

に起工して明昌三年（1192）三月に竣工し、廣利橋と名付けられた。盧溝橋が跨ぐ河名は、清代の「畿南河渠通論」に「永定河亦名盧溝河、亦名渾河、亦名桑乾河、永定之名、聖祖仁皇帝所命也。發源太原之天地。」[2]とあるように、盧溝河、渾河、桑乾河などと呼称されていたが、清朝の康熙帝によって永定河と命名され今日までその名は一般に呼称されている。

盧溝橋に石橋が架けられる以前にあって宋の張舜民の『使遼録』に「過盧溝河、伴使云、恐乗橋危、以車渡極安而速済。」[3]とあり、『三朝北盟會編』巻十四に「宣和五年二月一日乙酉朔、金人遣趙良嗣過盧溝河、即焚橋梁次舍。」[4]とあり、宣和五年（1123）に金の宋への使者趙良嗣が、また宋から金朝への使節となった許亢宗の『宣和乙巳奉使金國行程録』に宣和七年（1125）に「過蘆溝河、水極湍急。燕人毎候水浅深、置小橋以渡、歳以為常。近年都水監輙于此両岸浮梁。」[5]とあり、盧溝河を渉っている。石橋が建造されるまで、人々は盧溝河の渡河に苦労していたことが知られる。

Ⅲ

盧溝橋の石造建設は金の時代に始まる。『金史』巻九、本紀九、大定二十九年（1189）六月丁酉の条に「作盧溝石橋」とあり、同書、巻九、明昌三年三月癸未の条に「盧溝石橋成。」とある。同書、巻二十七、河渠志に「[大定]二十八年五月、詔盧溝河使旅往来之津要、令建石橋。未行而世宗崩。章宗大定二十九年六月、復以渉者病河流湍急、詔命造舟、既而更命建石橋、明昌三年三月成。勅命名曰廣利。」とあるように、盧溝河に架橋するのは往来の人々の便宜を計るためとして石橋の建造を大定二十八年（1188）に命じた金朝の世宗が没し、次代の章宗が二十九年六月に再度命じて明昌三年（1192）に竣工した。『永楽大典』に収められた「順天府志」宛平縣、橋梁に「盧溝石橋、金・大定十七年所建横跨渾河、長二百餘歩、其上両傍、皆設石欄琢石獅、形状奇巧。」[6]とあり、盧溝橋は歩幅で約二百歩であり、この石橋の特長の一は欄干の石造獅子（写真③）であるが、それを「奇巧」と表現している。石橋は洪水等でしばしば破損したが、明朝、清朝と修復され、康熙八年（1669）の重修の際は『聖祖実録』

写真③　盧溝橋の石獅子像の一

巻三十一、康熙八年十月己巳（九日）の条に、「以重修蘆溝橋告成、御製碑文。其詞曰、（中略）自此萬國梯航、及民間之往來者、咸不病渉、實藉河伯之霊。」と石橋の修復は多くの人々に便宜を与えると記している。

南宋の嘉定四年（1211）に金朝に派遣された賀金国正旦国信使となり金に赴いた程卓の『使金録』に、金朝からの帰路の嘉定五年（1212）正月六日に盧溝橋をわたっている。「過盧溝河石橋、長九十丈、毎橋柱刻獅子象、凡数百、所謂天上人間、無比此橋。」[7]とあるように、盧溝石橋が建造され二十年後と言う直近の記録として貴重である。程卓は、石橋の欄干に刻された石獅子像に深く感銘を受けた。

元の時代にはマルコ・ポーロもこの盧溝橋をわたったとされる[8]。

明・都穆の『使西日記』巻上、正徳八年（1513）四月二十八日の条に、「正陽門西南四十里、至盧溝河、其水古之桑乾、上有橋長六十丈、相傳金明昌初建橋」[9]とあり、都穆は盧溝石橋を経て慶藩壽陽王妃の冊封のため北京から寧夏に赴いている。天啓四年（1624）十月十二日に盧溝橋を渡った朝鮮使節洪翼漢は「抵桑乾河、渡蘆溝橋、乃元時所建、本朝葺之。即皇都八景之一、而暁月所翫處也。」[10]と記している。盧溝橋は北京八景の一として有名であった。このことは、明末期の路程書の一種である『士商要覧』巻一に安徽省の徽州府より徐州を経て北京に赴く陸路程に河間府を経由して北京に至るが、北京順城門の手前に「蘆溝橋」とあり「三十里至北京順城門」[11]とあり、さらに同書巻二に「京都八景」に「在府西十五里、其源出山西

太行山、入苑平境、其橋金建。本朝正統年重修、長二百余歩、石欄干刻獅子形、毎早晨波光映月、為京都八景之一、曰盧溝暁月。」[12]と記しているように、盧溝橋の幅を二百余歩として、「盧溝暁月」（写真④）は北京八景の一として著名であった。

清・黄叔敬の『南征記程』康熙六十一年（1722）二月二十一日の条に、「過盧溝河、即桑乾、源出山西馬邑縣、自保安州、流遷西山至府西南、一名小黄河、金明昌三年建石橋。」[13]とあり、黄叔敬は台湾の巡察御史として派遣され福建に赴く途上において、北京出発まもなく盧溝橋をわたっている。

Ⅳ

上述のように盧溝橋渡橋のことは多くの人々の記録に見える。とりわけ石橋に刻された石獅子像は「昔から此の全獅の正確な数を計へた人が無いと云ふのでも有名であるが、其の個々の作に就て見ても古雅まことに捨て難いものがあるのを覚える。」[14]と云われているが、現在の盧溝橋の入場券には、盧溝橋は全長266.5 m、幅7.5 m、橋梁が11箇所、石獅子は501箇とされている。

盧溝橋に隣接する城内には〈中国人民抗日戦争紀念館〉（写真⑤）（住所：北京豊台盧溝橋城内街101号）があり、抗日戦争に関する様々な資料が展示され、中国近代史研究にとっても必見の博物館と言える。

写真④　「盧溝暁月」

写真⑤　中国人民抗日戦争記念館

---

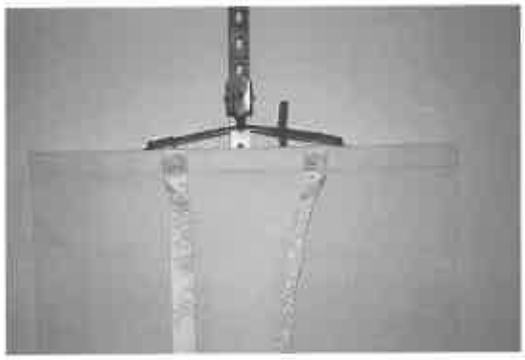
(1) 『光緒順天府志』北京古籍出版社、第6冊、1734頁。
(2) 『皇朝経世文編』巻107、工政13。
(3) 『盧溝橋文集　盧溝橋與北京城』1987年5月前言、32～33頁。
(4) 景印文淵閣『四庫全書』350冊101頁。
(5) 『靖康稗史注』中州文献叢書、中州古籍出版社、1993年2月、21頁。
(6) 『順天府志』北京大学出版社、1983年4月、277頁。
(7) 『四庫全書存目叢書』史部45冊45頁。
(8) 愛宕松男訳注『東方見聞録I』東洋文庫158、平凡社、275～276頁。
(9) 『四庫全書存目叢書』史部127冊638頁。
(10) 『燕行録選集』上、成均館大学校、148頁。
(11) 楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程図引・客商一覧醒迷』山西人民出版社、1992年9月、356頁。
(12) 同書、450頁。
(13) 『四庫全書存目叢書』史部128冊553～554頁。
(14) 安藤更正『北京案内記』新民印書館、1941年11月初版、1943年1月10版、142頁。

展示のたのしみ
—掛軸三昧—

井溪　明

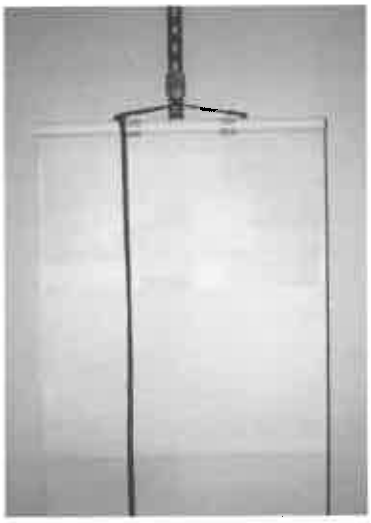
掛軸は、学芸員にとって、とりわけ人文系の学芸員にとって一番扱う確率の高い資料群といえる。少なくとも日本東洋の美術歴史系の博物館美術館では必須の資料である。ところがその扱いとなると、決して十分とは言い難いのが実状であろう。尤もその大きな原因に普段の生活の中で掛軸を扱うことが格段に少くなっていることが挙げられる。住宅事情もあろうが今の日本家屋の多くに床の間が備えられることが無く、またあったとしてもかける軸もなく、百歩譲って軸はあっても、年中同じものが懸かっていて、取り替えることすらほとんどないのが現状であろう。そんな中で暮らしていて、掛軸に馴染みなさい、という方が酷なのである。しかしこの種の館に就職したなら、否が応でも接しなければならないのが、この資料である。ではどのようにすればよいのか。無論こうすればばっちり、などという秘術があるわけではないが、筆者のつたない経験から掛軸に馴染むことの例をお知らせしてみよう。

何でもそうであるが、その資料の取扱に親しむことがまず第一である。軸の構造は至って単純で、上部には壁などから吊すための紐とそれを固定する金具と八双と呼ばれる木部、中心部は絵や書などの所謂「本紙」という部分とその回りの、洋画なら額縁にあたる色柄とりどりの表具、最下部には全体の重しと、巻いたときの芯となる軸木、簡単にいえばこの三部から成り立っている。これを壁面にかけるときも高さを調節するための「自在」と高いところに掛けるときには「矢筈」という道具などを用いれば、誰でも簡単に掛けることが可能である。巻き上げるときも、何十回か練習すれば、俗に言う算盤玉的な両端のどちらかへのゆがみも「コツ」が判るようになり少なくなる。細かいことであるが、掛軸は特別な理由のない限り、真っ直ぐに掛けるのが当たり前である。微妙にゆがんでいる軸は、何か不安な気分にさせるものである。また巻緒の端が掛緒の中程で止まっていたり、立っていたりすることも見苦しさを与えるもの



1　見映えの悪い例（1）
掛緒と巻緒の位置

2　見映えの悪い例（2）



3　適切な例（ウラ側）

である。さらに悪い表具で両縁が丸く反ってきたりする事があるが、これも見苦しいし、場合によっては温湿度管理の不行き届きさえ疑われる。そんな際は縁を簡単な道具で軽く押さえるなどの工夫はあって良い。

これで展示するための基本的な部分はマスターすることが可能となる。しかし、それで展示が出来たとは未だいえない。ここからがいわば本題である展示の楽しみなのである。

まず、軸をどれくらいの高さに、さらに大きなケースに何本も吊る場合は、どんな順番でどのような高さで、どのような間隔で、あるいは内容を加味しながら展示してゆくか。簡単なようでそうではない。時代順・内容順あるいは違う意図でもって一連の掛軸をどのように展示するかは、まさに学芸員の展示意図やセンスなどにも大いに負うところである。

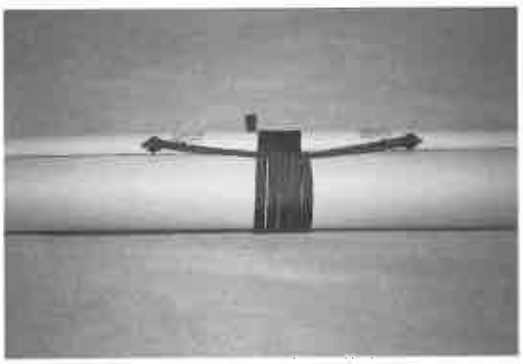
まず高さについて考えてみよう。ケースの構造にも因るが、軸が十分に吊れるだけの内寸がある場合は、目線を中心として考えてみる。展覧会の来館者層を念頭に置きながら、どの層の人々が多いか、あるいはターゲットとしているか、それによって目線の高さが違ってくるのは当然である。またどう見て欲しいか、例えばそこに掛軸が掛けられているような、つまりは床の間感覚で見て欲しい場合は、やや軸の中心は高めに見上げるように掛けられる。他方、純粋に内容本位での見方を望むなら、一番見やすい高さを模索することとなる。また資料の内容から考えて、どのような高さや位置関係で見られることを作者は欲したか、あるいはそれを所蔵してきた人々は考えたか、そのためにどのような表具にしたか、などなど。以外と考えてみるための観点は多くあることが判る。

これこそが学芸員の醍醐味なのである。いかに資料が最大限生かされるような展示を考えるか。それは単に独りよがりとなるのではなく、なるほどこの資料はそういうものであるのか、ということを見る側に自然に感じさせるような展示が出来れば楽しいことである。一本の掛軸を試すつがめつ、何度もケースの内外を行ったり来たりすることの労を惜しんではならない。むしろそこから今まで気がつかなかったものを発見できる楽しみと喜びを感じてゆくことこそ展示の面白さであるといえる。

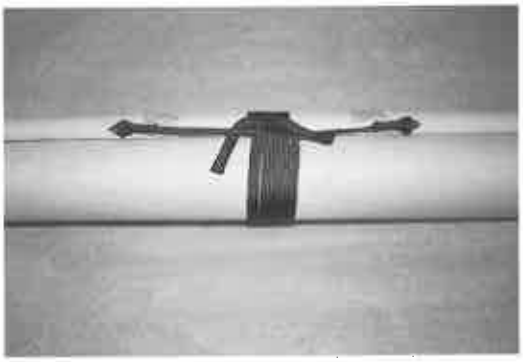
4　悪い例

5　良い例(下からきっちり巻く)

軸の巻き方



6　本紙へのストレスを与えない巻緒の処理



7　ストレスを与える巻緒の処理
(掛緒の下をくぐらせる時に押さえること)

京の雅、打掛の美
—羽間平安理事長寄贈の打掛７点—

羽間平安関西大学理事長より、平成12年10月12日、関西大学博物館に打掛７点の寄贈がありました。羽間家は、大阪の海老江にある旧家で、江戸時代の天文学者　間重富を祖先に持ち、日本の天文観測の黎明期を示す観測機器や、古文書、書画など、多くの文化財を受け継がれており、大阪史の宝庫とも称されています。今回寄贈の打掛は、文芸にまで及ぶ羽間家の多様な活動の一端を示すものでしょう。

寄贈をうけた着物資料は、江戸時代末から明治初期に京都で制作され、舞踊などで打掛として使用されたもので、小袖と振袖がありますが、いずれにも踊りや季節にふさわしい題材が見られます。大阪の旧家の「粋」を示すものといえましょう。

寄贈リスト

茶繻子地岩につた紅葉紋様繻小袖（打掛）
●裏地　松葉に千鳥紋

茶繻子地垣に秋草雁紋様染繻振袖（打掛）
●小督に題をとったもの

白繻子地松竹梅紋様小袖　（打掛）

ねずみ縮緬地菊水紋様小袖（あるいは菊慈童）（打掛）　●替の振袖あり

もえぎ繻子地絵本散紋様染繍振袖（打掛）

憲法繻子地八ッ橋紋様染繍振袖　（打掛）

濃緑羽二重地屏風紋様染繍振袖　（打掛）

白繻子地松竹梅紋様小袖　（打掛）

茶繻子地岩につた紅葉紋様繻子小袖　（打掛）

濃緑羽二重地屏風紋様染繍振袖　（打掛）

この寄贈をうけ、関西大学博物館では、平成12年11月27日から12月20日まで、第2展示室を使って平成12年度新収蔵資料展「京の雅、打掛の美」を開催しました。開催中、多数の来館者があり、江戸時代末から明治初期の京と舞踊、打掛に表された伝統の重みを実感された方が多くおられたようでした。

この度ご寄贈いただいた江戸末から明治初期にかけての着物資料は、生地や糸が絹で、紫外線による退色・劣化や虫害が進行するものであることから、その保存のために、高温多湿な時期での展示や長期の展示には困難があります。また、取り扱いには厳重な配慮が必要で、展示ケースの対応も問題となります。関西大学博物館では、このような条件を考慮し、充分な活用を計っていきたいと思います。

今回の振袖7点の寄贈により、これまで考古学・歴史学の資料が中心であった関西大学博物館に、「粋」と華やかさを添えることになりました。

羽間平安理事長

展示風景1

展示風景2

研究成果としての展示
—近年の銭貨の展示から—

西　川　卓　志

1．はじめに

ここでは、近年の銭貨の展示を紹介するとともに、日本における銭貨研究の進展と銭貨の展示方法を材料に、博物館における学術研究と展示の関わりについて略述したい。

2．銭貨のコレクション

銭貨コレクションの形成は、博物館史上もっとも原初的な収集活動の成果である。各金融機関がその社会的な責務の一環として収集しているもの以外にも、個人や機関を問わず多くのコレクションが存在する。経済史に関わる資料の収集という動機以外にも、金銀貨等の独特の美しさ、稀少資料を希求する収集欲、また収集品としての手軽さも手伝ってか、古くから多くのコレクターの収集対象となり、多くの伝世品を生み出し、結果として博物館に多くの銭貨が蓄積されることとなった。これらの研究は経済史（貨幣史）の一環として永年にわたって進めらてはきたが、実物そのものを直裁的に対象としてきたのは、やはり観泉家による「銭譜」・「観泉書」の編纂や観泉会の世界であった。これらは余技的なものとして揶揄される対象では決してなく、貨幣個々の認識という点では独特の成果を生みだしてはきた。しかし、それは鑑賞の域に止まり、珍奇資料の猟渉と資料の特異さを競うことをつねとし、収集の成果が教育という形で活用されることはなかった。そこから生まれた展示は、コレクションの披瀝であり、陳列する基本姿勢は個々人に帰結するものであった。それでも優れた伝世資料は多くの愛好の師を集めたが、不時発見の錆結した銅銭などは、かつては骨董商の店先でバケツに山盛りにされていた。これらの銅銭は地中から出土するものとして、一部の考古学研究者たちにより歴史時代考古学の一分野として取り上げられることはあったものの、出土遺構の所属時期の上限を画するメジャーとして使われるのがほとんど唯一の活用法で、考古資料としてもあまり多くを期待されることはなかったし、また文献史学の経済史研究と連関するレベルでもなかった。この傾向は、とくに我国中世期の銭貨において顕著で、最初期の自国生産品である古代の銭貨や、近世初頭から江戸時代の銭貨とは、その歴史的な研究の蓄積において大きな隔たりがあった。

3．近年の銭貨研究

しかし、近年、中世期を対象とした考古学から、この中世期の銭貨研究が大きく動き始めた。それにはいくつかの流れがある。

1．中世期の大量出土銭の徹底した整理分析また近年では、発掘調査によって大量出土銭が検出される例が増加した。
2．中世期都市遺跡の調査成果がもたらした、鋳銭遺物の確認
3．中世期遺跡の発掘調査がもたらした、銭貨を伴う豊富な遺構群の発掘調査

に整理されよう。1の成果は中世期各時期に流通する銭貨の具体相を明らかにするとともに、私鋳銭の抽出に成功し、各時代の流通銭貨に占める私鋳銭の割合をも算定するにいたった。さらに、いわゆる「撰銭」の対象となった粗悪銭の実物を特定するとともに、2の成果をもとに「鋳写し銭」の製造方法・製造場所・製造量、また化学的な分析による原料供給地の相違に関しても一定の結論を導き出している。また、銭緡の統計処理、特定の銭種（永楽通寶や洪武通寶）の分布にある偏差の確認など、累々と積み上げられてきた文献史学・経済史学の成果と突き合わすことができる成果を生み出しつつある。さらに、3の成果からは、生活史の点においても関連分野との学際的な研究を進めることができるところまできた。この点において、銭貨はかつてのような愛玩の対象となる美しく珍しいだけのものではなくなった。とくに、中世期の錆着した銅銭への執着が生み出した成果は、緑色の塊としてしか扱われることのなかった銭貨について、一点一点吟味できる視点、つまりは一点一点を個別に展示できる前提を提供した。いままでのような、その歴史的評価が定まらない、または評価していく具体的な方法の整わない資料では、展示を組み立てるのは困難

である。銭貨、とくに中世期の銭貨では「観泉」という世界から脱皮する具体的な手段がようやく整ってきたといえる。

4．銭貨の展示

その成果をもとに、ここ数年、銭貨をテーマにした展示会を観覧できる機会が多くなった。国立歴史民俗博物館の「お金の玉手箱～銭貨の列島2000年史～」をその大規模な例として、岩手県立博物館で実施されたものなども、重点的に扱う時代に差はありながら、中世期の出土銭について最新の研究成果をもとに身近な資料を整理紹介していた。筆者も「銅銭の考古学」というテーマで1993年に銭貨の展示を実施した経験をもつ。館蔵資料に、不時発見後20年の間徹底整理されることのなかった大量出土銭2箇所分20000点以上があり、時期を得てその整理を行い、いろいろな興味深い事実が判明したことから展示を企画した。たんなる銭種の紹介に止まらず、当時の最新研究成果の一部を地元資料で紹介できた。きわめて狭隘な展示テーマではあったが、お金のもつ魔力か、多くの観覧者を得た。その後の銭貨研究はさらに進展し、発掘調査される大量出土銭の増加も手伝って、中世期の銭貨流通の実態はかなり具体的に把握できるところまできた。

これらの成果を十分に咀嚼した展示会を見学する機会を得た。愛媛県立歴史文化博物館が実施した「出土銭貨を探る」～県内の中世出土銭貨～がそれである。銭貨の展示会ではもっとも近時のもので、大展示会というものではなく、平成12年度テーマ展として実施されたものであった。展示の主人公は銭貨、とくに中世期の銭貨で、近年の中世期の銭貨研究の成果を十分に反映した小気味よい展示であった。学芸員の銭貨に対する問題意識にそって、「1．銭貨を調べる」、「2．大量に埋められた銭貨」、「3．墓に埋められた銭貨」、「4．神仏に捧げられた銭貨」、「5．城館出土の銭貨」の小テーマが設けられ、出土時には錆結していたはずの小さな展示物が姿勢をただして並んでいた。そこには飾り物ではなく、銭貨そのものを凝視させる展示が展開し、銭貨は資料としてまた展示品として、その役割を十分に発揮していた。銭貨の美しさや珍奇さを競う展示ではなく、緑青まみれの資料が含有する歴史情報を十分に満喫できる展示であった。さらに、重要な点は、展示物を愛媛県内に求めていることである。県立博物館なら当然ではあるが、最新研究の成果に追従するがあまり、他府県に散在する良好な資料を借り歩くというのではなく、この展示会を、新しい視点で県内出土資料を再評価していく機会にしようとする姿勢が見られた点が重要であった。展示の情報をパックしたブック・レット（無料配布）には、県内資料が集成され、平易ではあるが事実関係に意を払った解説がふんだんに織り込まれていた。近年明らかになりつつある中世期の銭貨が持つ、歴史資料としての面白さと不思議さを垣間見ることができる展示会であった。

5．おわりに

以上、出土資料による銭貨研究の進展と、近年の銭貨の展示について言及した。かつての観泉会や優れた伝世品の展示を否定するものではなく、ある資料が学術研究の進展に伴い新たな視点を得て、展示の場で活用される可能性が増加したことを重要視したい。奈良・平安時代の銭貨として皇朝十二銭が並び、江戸期では大判小判を筆頭におなじみの寛永通寶がならぶ。その間で、いつも適当に緑青のついた中国銭を並べて済ませておけばよかった中世期の銭貨展示が、近年の銭貨研究の進展で大きく変化せざるを得なくなった。その内容の深化と広がりは、学芸員個人の興味が反映できるまでになり、展示資料の選択にあたっては、もう「適当」ではすまなくなった。また、研究の進展は、確定的な結論を生み出してきただけでなく、多くの学術的な疑問点をも顕在化させてきた。例えば、銭貨を大量に埋納する理由がそれである。大量埋納銭の豊富な実例を通覧すればするほど、一元的な解釈は困難かと思われる。丹念に作られた銭貨の展示にあっては、この問題点は素直に展示室に顔を出す。興味深いのは、大量出土銭の展示を観覧した見学者は、当然のようにこの疑問点に引きずり込まれ、研究者の頭を悩ます問題を共有することになる点にある。銭貨研究のもたらした成果は、小さくて静かな展示物であった銭貨、その展示を大きく変えつつある。博物館のワークショップとしても、なにかできそうな予感がする。

博物館だより

◇平成12年度　関西大学博物館　開館日数・入館者数（入館者数は3月16日現在）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	24	21	19	18	5	10	23	18	17	13	11	6	185
入館者数	809	1368	180	342	459	160	324	845	99	46	39	21	4692

◇平成12年度　考古学入門講座「着る・飾る―衣食の歴史とその意味―」の開催
10月28日㈯から11月25日㈯まで、毎土曜日5回の講座を行い、合計876名の受講者がありました。

◇平成12年度　博物館購入資料
・インド祇園精舎発掘佛足レプリカ
・インド舎衛城発掘鰐口レプリカ

◇平成12年度　博物館受贈資料
・中国文房諸具55点（詳細については先号掲載）
・泊園印石　　130点
・打掛資料　　7点（詳細については本号掲載）

打掛の写真撮影風景

◇平成12年度　博物館収蔵資料の補修
・庇付冑付挂甲の補修
・国府遺跡出土玦状耳飾装着頭骨レプリカ作製

国府遺跡出土玦状耳飾装着頭骨レプリカ

◇平成13年度　関西大学博物館企画展ならびに博物館講座の開催について
平成13年4月5日㈪～5月21日㈯の間、企画展「インド・パキスタンの古代都市―都市と村の暮らし～古代から現代～―」を関西大学博物館第2展示室で開催します。
また、企画展に関連した博物館講座を、4月28日㈯午後1時から3時半まで行います。演題と講師については次のとおりです。
「インド・パキスタンの古代都市―都市と村の暮らし～古代から現代～―」
関西大学助教授　　米田　文孝氏
関西大学大学院博士課程　上杉　彰紀氏
どちらも入館・聴講は無料です。多数のご来場をお待ちしています。

編集後記

『阡陵』第42号をお届けいたします。上井久義館長、藤善真澄教授、松浦章教授、また西川卓志氏（西宮市立郷土資料館）、井溪明氏（堺市教育委員会）には玉稿をいただきました。ご執筆してくださいました先生方には感謝申し上げます。
今年度は、本号に紹介いたしましたように、羽間平安理事長より打掛7点の寄贈がありました。今後、博物館で存分に活用していきたいと考えております。
表紙写真は、羽間平安理事長寄贈の打掛「茶繻子地垣に秋草雁紋様染繻振袖」で、季節や題をおりこんだ振袖です。

関西大学博物館彙報　No.42　平成13年3月31日　発行
関西大学博物館　編集
ナニワ印刷㈱　印刷